

矢臼別—そこで問われているのは平和だけでなく、祖国日本の独立と主権(1)

「第47回矢臼別平和もちつき望年会」、8月9日の記念すべき「第50回平和盆踊り」へご参加を



昨年2013年12月29日 川瀬牧場内D型ハウスで、第47回「矢臼別 平和もちつき望年会」が開かれました。釧路駅から自動車ですぐのこの会場に、前夜からの参加者や子どもたちも含めて、100人近くの人びとが参加しました(=写真)。

「草の根ニュース」の記者は、12月25日の安倍(首相)仲井真(沖縄県知事)会談の結果、仲井真知事が、ジュゴンが住む美しい辺野古の海を埋め立てることを認めることにしたというニュースを聞き、激しい怒りを感じました。

記者は、沖縄県の米軍基地(37基地)をなくすためには、全土基地方式で日本全国に203もの基地を置かれている日本の状況を変えるしかない、という強い思いがあります。そういう動機で、辺野古のある日本の南端沖縄県ではなく、最北端の米軍基地(米軍1時使用の自衛隊基地だが、れっきとした米軍基地) 矢臼別演習場でおこなわれる「平和もちつき望年会」に参加し、安倍、仲井真両政治屋(「政治家」の誤植ではありません。金で国民と県民を売る死の商人たち)

に抗議の意思を示し、69年も続く祖国日本の全基地撤去へ向けて決意を新たにしようと思いましたが、あいにくの歳末で、釧路行きも、矢臼別に近い中標津^{なかしべつ}行きも飛行機がなく、やむをえず、26日千歳飛行場近くに一泊して、翌日中標津空港まで行き、27日は中標津で更に一泊して、前夜祭に参加するため、28日朝別海で地元活動家の車に拾ってもらい参加することができました。

紙幅がないので、朝日新聞記者古源盛一さんの記事をインターネットから引用して、川瀬さんの家に後を継ぐようにして今住んでいる渡辺佐知子さんのことをご紹介します。もちつき望年会では、もちろん、お目にかかることができました。

この望年会も47回になりましたが、今年2014年夏の「矢臼別平和盆踊り」は、記念すべき第50回になります。地元の実行委員会では、全国からの参加を呼びかけています。

沖縄米海兵隊が、日本国民の税金で年4回も砲撃演習をする矢臼別演習場は、日本が米軍地位協定に基づく「全土基地方式」の下で、69年間、外国軍=米軍の占領下にあり続けていることを、象徴的に示しています。去年は、演習の米軍砲弾が演習場外の国道から700mの所に着弾しました。是非全国からのご参加を、心からお願いします。(H)

■演習場で問う平和

【朝日新聞古源盛一記者】日本一広い陸上自衛

自分の国・憲法は自分で守ろう、軍事力ではなく憲法力と国民の団結力で。占領69年の2014年を主権回復へ始動の年に「平和的で責任ある政府が樹立されたとき、連合国の占領軍は、直ちに日本国から撤退しなければならない」ポツダム宣言

隊矢臼別演習場（別海町など3町）。その演習場に取り囲まれた川瀬牧場に住み続け、演習場反対運動の象徴だった川瀬汎二さん（享年82）が2009年4月に亡くなってから丸4年になる。

川瀬さんの自宅には今、死後に遺族から家を借り受けた渡辺佐知子さん（48）が暮らしている。牛2頭と犬1頭、それに、川瀬さんが飼っていたカメが一緒だ。朝夕、渡辺さんは車で約10分の知り合いの牧場に通り、酪農ヘルパーとして働く。「自然の中で等身大で暮らしていく。やっと慣れました」

1996年、札幌で通っていたキリスト教会の平和運動がきっかけで川瀬さんのもとを訪れるようになった。「生命を育む豊かな牧草地。こんな場所で暮らせたらと思った。そこに、なぜ演習場があるのだろう」

自衛隊や米海兵隊の演習に対する抗議活動に参加。社会人入学した大学の卒業論文で矢臼別を取り上げる一方、農業での生活にあこがれて移住を決意した。近隣の町で実習を積んでヘルパーとなり、04年秋に川瀬牧場の一角に引っ越した。

「平和運動の後継者」。当初は気負いもあったが、次第に変化した。一番近いコンビニエンスストアまで車を飛ばしても20分。トイレは自分でくみ取る方式で、家までの道は除雪もなかなか来てくれない。環境は厳しいが、生きている実感はわく。

生前、川瀬さんは「こちら側」「あちら側」という表現をよく使った。こちら側とは矢臼別に住む自分たちで、あちら側はそれ以外を指す。「自衛隊も、平和運動で集まる人もあちら側なんです。自分が切り開いた土地での生活を守る。それを脅かされないために平和運動があると

感じた」と渡辺さんは言う。

移住から8年、自衛隊側の態度が徐々に強くなってきたと感じている。

07年10月、川瀬牧場につながる町道が演習を理由にロープで一時封鎖された。10年夏には、川瀬牧場のすぐそばで自衛隊がテントを張って野営、戦車隊が牧場付近を通行した。約束に反し、ヘリコプターが敷地上空を低空飛行することが、昨年までに3年連続であったという。

抗議を続けている矢臼別平和委員会の吉野宣和事務局長は「広く言うと、07年に防衛省に格上げされてからの変化。自衛隊の活動の拡大が、隊員の態度にも現れているのではないか」とみる。

自民党は改憲草案で、憲法9条が規定する「戦争の放棄」を「安全保障」に衣替えし、内容を大幅に書き加えた。第1項で「戦争を放棄する」との文言は残す一方、第2項で「前項の規定は、自衛権の発動を妨げるものではない」と規定。「国防軍」の保持をうたう新たな項目を設けた。領土問題が緊迫する中、自衛隊の活動を正式に位置づけたとも言われる。

渡辺さんは「改憲したい人たちの議論を聞くと、自分たちが『美しい』と思う方向に個人を合わせようとしていると思う」と話す。演習場に個人で反対してきた自分のような存在にどう影響するのか。漠然とした不安がある。

渡辺さんは一昨年に乳がんが見つかり、一度は矢臼別を離れることも考えたが、思い直した。

「周囲からは『演習場内で頑張っているのはすごい』と言われますが、一人ひとりが自分の生活を守るために頑張っているという点では同じ。ここで私が暮らし続けることで、多くの人に考えてほしいのです」